

# 大島幹雄さん

(サーカスの「呼び屋」)

## 国境なきサーカス団

みずからの感覚を信じて海外のアーティストを見つけ、日本で公演を手がける「呼び屋」。早大露文出身の若者は、その醍醐味に魅せられ、それを生涯の仕事とした。日本の、世界の、サーカス事情を聞いた。

バクチみたいなんんです

——呼び屋とはあまり耳にしない職業ですが、どんな仕事なんですか。

一言でいえば、海外からアーティストを呼ぶ仕事。だから呼び屋です。戦後間もない時期にドン・コザック合唱団やポリシヨイバレエなどを招聘した神彰、小説家の井上靖が『闘牛』で書いたイベントプロデューサーの小谷正一が存在が呼び屋の出発点といわれています。ビートルズ来日公演を成功させ「ビートルズを

呼んだ男」として有名なのは水島達司。「カシアス・クレイ(モハメド・アリ)を呼んだ男」は康芳夫。——有名な呼び屋は「○○を呼んだ男」と呼ばれるわけですね。

ビートルズやモハメド・アリ、マイケル・ジャクソンのような誰もが知るスターを呼ぶのは競争が激しくて興行の規模も大きい。でも、サーカスのアーティストを専門に呼んできた頃は、そこは無縁だった。まずアーティストを探すために海外を旅する。そして見つけたアーティストが日本で当たるかどうか自分の才覚で見極める。当たったときは、何物にも代えが

たい快感です。そのぶん、外れたときはホントに怖い。まあ、バクチみたいなんんです(笑)。

——どんな仕事に印象に残っていますか？

一九八五年に東ドイツから招いた「国立ドイツ動物大サーカス」ですね。象五頭、白熊十七頭、馬二十頭、ライオンやヒョウ、ワニにニシキヘビなど百頭の動物が登場する戦後最大規模の興行でした。ぼくは中央放送エージェンシーという呼び屋会社の関西地区を担当

する責任者として、チケット販売、団体客のセールス、会場の交渉、宣伝、保健所や消防署への申請など駆け回りました。

大阪市に許可を取り動物たちを大阪城公園の中に置かせてもらって、市民にただで見てもらえるようにしました。市の担当者からは「くれぐれも檻の外に出さないでください」と釘を刺されたのですが、数日後、「公園を散歩していた人から象が歩いているのを見た」と連絡がきた」と大変な剣幕で呼び出された。公園に駆けつけるとあちこちに象の糞が落ちていて、調教師に問い質すと、檻の中ではストレスが溜まるから散歩させたという。結局、始末書を書くハメになりました。けれど、興行が当たれば、そんな苦労は吹っ飛んでしまう。大阪公演ではウソかと思うほど客が入りました。常設のチケット売り場だけでは対応しきれずに、テントを特設チケット売り場にして、タバコが入っていた段ボール箱をお札入れにした。箱にどんどんお札が溜まって、箱を回収して百万円ずつ束ねていくと一千万以上になりました。一日で、ですよ。楽しくて楽しくて、毎晩、北新地で飲みまくっていました。

でも、その後の東京公演でオオコケ。あわや倒産と



おおしま・みさお 1953年宮城県生まれ。早稲田大学第一文学部露文科卒業。石巻若宮丸漂流民の会事務局長、早稲田大学非常勤講師も務める。著書に『明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか』『虚業成れり「呼び屋」神彰の生涯』『満洲浪漫 長谷川濬が見た夢』『(サーカス学) 誕生 曲芸・クラウン・動物芸の文化誌』などがある。